

庭園と建築の見学会 ~大阪編~ 加賀屋新田会所跡・千島土地株式会社・名村造船所

前田 隆子



遠州流築山林泉廻遊式庭園

2013年10月5日(土曜)住之江公園駅から出発。徒歩15分余りで、加賀屋新田会所跡に到着。

ボランティアの人の案内で会所内を見学する。江戸時代、幕府が町人請負新田開発を奨励したことで、江戸をはじめ、多くの新田開発がなされた。大阪では、春日出、市岡、津守、等他にあったが、現存するのは、加賀屋新田会所のみである。会所とは、開発した新田の管理、税、人別帳など現在の役所もかねている。町人自らが、財を出し作りあげた為、その名がつく。庭園は、心字池を中心とした小堀遠州風の築山林泉回遊式で、

緑が多く、木橋があり、時代を感じた。

四阿(あずまや)「明霧亭」は、空襲で焼け、階段と礎石だけになっており、昔はここから、淡路島がみえたとは驚きであった。待屋(待合)「偶然亭」から茶室「鳳鳴亭」へ、墨書の額と欄間がよかった。図案化された模様が数種類あり、下からよくみられる様にと和紙がはられていた。書院では、墨痕あざやかな、中国の文人、羅振玉の書が印象的であった。

次に千島土地株式会社へ行く。休日にも拘わらず見学させて頂く。芝川家所蔵の書院窓、ポスター等趣があった。壁の隅一杯に貼られた、純白のタペストリーは、多分、紙製ではないかと思うが繊細かつ、大胆なデザインに目を奪われた。

最期は、名村造船跡地である。海にドッグがあり、映画撮影に使われたと聞く。大きな建物の二階は、クリエイティブセンターとして活用。最上階は、床一面に線の跡が生々しい。ここで、原寸大の船体図面が書かれた。這いつくばって、仕事に打ち込む人間の姿を階間みた。

初めて、参加して感じた事は、大阪に住み乍ら、大阪を知らないという点だった。又、機会があれば仲間に入れて頂き、学びたいと思う。とりわけ、学芸員さん達には、分かり易い説明をして頂いた。

お礼を申し上げます。



加賀屋新田入り口で説明をきいているところ

庭園と建築をめぐる ~大阪編~

加賀屋新田会所跡、千島土地(株)、名村造船所跡地

西形 嘉之



旧名村造船所大阪工場 4階の旧製図室

平成25年10月5日 午後1時、地下鉄四つ橋線住之江公園駅に集合。参加者40名程度の中に、勧誘した仲間の顔を見出した。

講師は、学芸員の酒井先生;近代建築の内装(装飾タイル、テラコッタ、ステインドグラス等々)に造詣が深い。常々、建築の魅力は、その全体を鑑賞し空間を体験することで、はじめて味わうことが出来るが、明治から昭和初期に建てられた大阪の近代建築は、装飾や材料などの細部にこだわりが感じられるものが多く、部分が全体の魅力を雄弁に物語るのがあると…

本日の行程は、最初の①加賀屋新田会所跡までウォーキングし、現地ボランティアの解説で見学、小休憩後、駅まで戻る。地下鉄で一駅の北加賀屋駅から②千島土地(株)までウォーキング、同社課長代理の川崎女史の挨拶の後、二班に分かれて解説を聞きながら見学。女史とは、6年ぶりの再会であった。次いで、近代化産業遺産である③名村造船所跡までウォーキング、やはり二班に分かれて解説を聞きながら見学を始めたが、いつの間にか、合体していた。後は、旧事務所棟前のフィールドをフリー散策、流れ解散で駅までウォーキング。

特に建築外装に関心があり、昨日発症した脊椎間狭窄症の強影響を鎮痛薬で騙し、右脚を引き摺りながらも、酒井先生の名解説を拝聴し、インテリジェンスな遊楽を過ごせ、知人とも帰路に一献を傾け、満足、満足…

業界のツアーにない、独自性のあるツーリズム、ツーリングを今後も期待したい。

①加賀屋新田の会所跡;加賀屋(桜井)甚兵衛家が18世紀以来約100年間で干拓した。天王寺屋等の近世豪商などは広大な新田を所有していたが、近代まで存続した大新田は鴻池善右衛門家が開発した鴻池新田である。加賀屋甚兵衛は、本業の両替商を廃し子孫四代にわたり新田開発に専念している。

②千島土地(株);国登録有形文化財「芝川ビル」の保存活用。芝川又右衛門邸は、京都高等工芸学校の武田五一の設計により、西宮市上甲東園に、明治44年(1911)に建てられた。芝川又右衛門は、大日本持丸長者鑑に名を連ねた豪商であった。阪神淡路大震災で被災し、解体され、博物館明治村に移築、増築部の主要建築部材は同社で保存、部材の一部は再利用。装飾タイルは芝川ビル内のトイレになどにも再利用。

③名村造船所大阪工場跡地(クリエイティブセンター大阪);北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想のもとに千島土地(株)が、所有管理、旧事務所棟4階の旧製図室では、床に直接船の原寸図を引いていた。



遠州流築山林泉廻遊式庭園

「続・熊野街道を歩く(第4回) 鳳～久米田 2013.12.15」に参加して

谷口 豊



昨年11月に友の会に入会して初めての参加です。JR鳳駅に集合。学芸員の大澤先生の解説による見学会の出発です。会員21名が参加されました。駅前の商店街を南へ。途中大鳥居の新王子の話がありましたが、場所は特定出来ていないようです。

ここで、王子のことをよく知りません。早速、先生に尋ねました。熊野詣の先達を務めた修験者により、守護する神は童子の姿をとるとの思想に基づき熊野権現の御子神を王子と命名したとか。その王子を祀る熊野大社に対する支社のようなもので、熊野参詣の途上で儀礼や足休めを行う場所として、沿道の諸社を王子として認定(九十九王子と言われているが、総数はそれ以上)したものとのことでした。

また、途中の道標や案内板に小栗街道ともかいてありました。説経で有名な「小栗判官」の伝説で小栗が熊野への湯治のために通った泉州地方の街道をそう呼ばれているとか。

商店街を抜け、少し行くと石の道標、続けて次の道標を見て、和泉市に入って地蔵と石の祠を見ました。その後、街道から少し西へ入ったところにある「旧府神社」を参拝しました。創建当初より古代国家の「宮」や「府」として祀りごとを司る要所の鎮守社とのこと。

街道に戻り南へ。聖神社の一の鳥居が左側に見えました。神社はかなり山手とのことで参拝はせず、説明を聞いた後「篠田王子跡」へ。後鳥羽院の熊野詣の際、ここで禊をされたそうで、結構大切にされた王子と説明されました。少し行くと「小栗判官の笠かけ松」がありました。その先に「平松王子跡」。ここは熊野詣での賓客を和泉の国が迎え入れ、もてなしが行われて宿泊もでき、他よりも立派な王子だったそうです。

すぐ南側の公園で小休止した後、少し歩くと古い街並みで旧家が残っており、街道の風情がありました。

小栗街道と記載の石の道標をみた後、「泉井上神社」に参拝しました。

神功皇后が行啓の際、突然清水が湧き出し、これを霊泉と言い、宮として祀った延喜式内社である。和泉の国名の由来で、ここが国府となり中心地となった。境内に和泉国五社を合祀した総社が建立されている。ここで昼食休憩。よく歩いたので美味しかったです。

休憩後、集合写真を撮り、「井ノ口王子跡」に着いた。小さい社はあるが、泉井上神社に合祀されているとか。その後、小栗橋を通り久米田駅西にある「池田王子跡」へ。痕跡はなく案内板があるだけでした。

久米田駅で解散しました。色々勉強もでき、会員の皆様とご一緒でき楽しい一日でした。



連載

「浪花百景」

～住吉反橋(太鼓橋) 住吉区住吉～

第19回

千倉 康由

地元では“すみよっさん”と呼ばれている住吉大社の名物は、幾つもありますが、中でも特に有名な反橋(太鼓橋)は、慶長年間に豊臣秀頼、淀君が再興、奉納されたものであるといわれています。昔はこの橋の近くまで波が打ち寄せていたそうです。

この橋を渡る意味は、神様に近づくのに罪や穢れを払い清めるためとのことです。反っているのは、地上の国の人と天上の神の国をつなぐ掛け橋として、虹にたとえられました。

初詣には200万人の人がこの橋を渡る光景は実に見事なものです。

最寄駅は阪堺電車『住吉鳥居前』駅下車、すぐそこが住吉大社です。

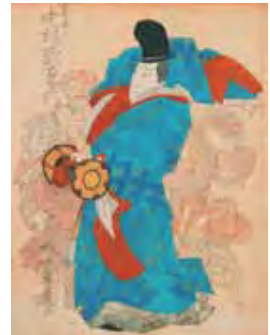


特別展「上方の浮世絵～大坂・京都の粋と技～」

上方絵は、18世紀の末に大坂や京都で生まれました。美人画はあまりなく、作品の多くが役者絵でした。役者を美化した江戸の作品とは異なり、写實的に描く特徴があるといわれています。また町のにぎわいや名所を描いた作品もあり、上方ならではの美意識が反映されています。

日本ではこれまであまり注目されてきませんでした。海外では上方絵のうち、特に大坂で出された浮世絵版画を「Osaka Prints」と呼び、独自性の高い芸術として評価されています。

近年、世界的規模での上方絵の調査研究が飛躍的に進みました。それらの成果をもとに、初公開作品15点を含めた国内所蔵品212件を展示し、約40年ぶりとなる上方絵の全体像を閲覧できる展覧会を開催します。



なりむら
四代目村中歌右衛門の業平
りゅうさいしげはる
柳斎重春 天保9年(1838)
山村流六世宗家 山村若氏蔵

平成26年4月19日(土)～6月1日(日)

- ◎休館日／火曜日(祝日・振替休日の場合はその翌日)ただし、4月30日(水)は臨時開館
- ◎開館時間／午前9時30分～午後5時(金曜日は午後8時まで)※ただし、入館は閉館の30分前まで。
- ◎会場／大阪歴史博物館 6階 特別展示室
- ◎主催／大阪歴史博物館、NHK大阪放送局、NHKプラネット近畿 ◎協賛／ニューカラー写真印刷株式会社

編集後記

今回の『歴友』いかがでしたか?来年度から友の会の運営が全面的に幹事の皆様に移行することもあって、実はこの号はほぼ幹事の方によって編集されました。刊行に携わられたみなさま、お疲れ様でした。これまで編集担当してきた事務局はこれをもっておしまいとなります。いままでつたない編集で会員のみならずにはご不満も多かったかと思えます。この場をお借りしてお詫びとお礼を申しあげます。今後もひきつづき『歴友』刊行をあたたくお見守りいただければ幸甚に存じます。(友の会事務局 加藤)